

伊達政宗公の逸話

2018 年 12 月 佐藤正喜

2024.1. 12 加筆④フォント 12

出来るだけ客観性のある記事にするため、一次史料(書状など)から引用した記事を中心に集め、随所に筆者の感想を挟んで編集した。

○疱瘡右目を自ら くり貫いた(又は小十郎にさせた)は本当か?・・・S49 年遺骨調査結果から・・・

独眼竜と呼ばれた政宗の**眼窩**(がんか:眼球が入る部分)、実際の調査では左右の損傷は見られず、これは、軟部の疾病によるものと推定されている。

『性山公治家記録』によれば、「**疱瘡(天然痘)ヲ患ヒシ時(年月不知)余毒御目ニアツマリテ ソレヨリ 右ノ方 盲イタマシナリ**」と記述されている。

なお幼児期の**疱瘡**による失明でありながら右眼窩の発達に影響が見られないことから、伊達政宗甲冑像のように両眼備わった状態で視力のみを失い、眼球内部異常で硝子体が白く濁っていたと考えられると結論している。

すなわち、**疱瘡**による失明は治家記録が記述するように事実であったとしても、右眼窩の発達には影響が見られず、両眼球が備わった状態で視力を失い、眼球内部の疾病により硝子体(水晶体の後方)が白く濁っていた(白内障とは異なる)という結論です。

従って、この調査では、**隻眼・・・つまり独眼であったことの立証はできなかったようで、「右目を自らくり貫いた(又は小十郎にさせた)」立証にはならなかったと考えられる。**

○政宗の落馬

「天正17年(1589)2月26日、米沢城下にて落馬し足を骨折した。大内、片平兄弟を先手として会津に攻め込む計画は一時頓挫することになった。」・・・『貞山公治家記録』

「天正17年正月末日、殿が落馬して足の骨を折った。幸い、治療が成功して骨はうまくつついたが、あんまり痛がって出兵なんて出来そうもなく、片平助右衛門の寝返りが延期になった。」

・・・伊達成実著『伊達日記』

*落馬で**左足**を骨折した政宗が、その傷を癒すため米沢の小野川温泉で湯治をしたという記録が残る。

*政宗公の左足のレントゲン写真(仙台藩志会講座『伊達家墓所発掘調査』)に骨折の跡が認められ、これは伊達治家記録の23歳時の落馬、負傷との合致を見るもので、この遺骨が政宗公のものであるという決定的証拠となったとのことであった。・・・仙台藩志会講座「伊達家墓所発掘調査」より

○弟小次郎殺害の真相は？・・・平成 25 年 2 月 第 21 回仙台市史セミナーから・・・

政宗毒殺未遂事件はこれまで多くの歴史研究家が母義姫の策略として捉えてきたことであるが、今回のセミナーはこれに異論を唱えるとともにこの説を根底から覆すものである。多くの証拠をそろえ、新説を理論的に唱えるのは元仙台市博物館館長で伊達政宗研究の第一人者と言わ

れる佐藤憲一氏である。

氏の結論は、「弟小次郎殺害はお家安泰のための偽装」ではなかったか、という新説の提起である。その証拠と考え方は次のように列挙されていた。

①従来もそうであったように小次郎を担ぎ出そうとする対抗勢力の動きを示すものは何も見られない。

②政宗と母は事件(天正 18 年(1590)4 月 7 日)直後も相当な頻度で手紙をやりとりしていた。政宗側から出された手紙の7通が現存するが、親子の情愛を感じさせ母との確執を見出すことはできない。

③母義姫は事件後、会津黒川城を出奔し実家である山形に逃げ帰ったとされているが、しばらくの間、伊達領であった岩出山に滞在していたことがわかった。文禄 3 年(1594)11 月 27 日、政宗の師である虎哉和尚が岩出山から京都にいる政宗の大叔父(大有康保和尚)に宛てた手紙で、「政宗の母堂が今月4日夜、最上に向かって出奔した、お聞き及びか」とある。この史料によれば、事件から 4 年後に岩出山を離れたことになり、政宗と手紙の交換ができたことになる。母義姫が毒を盛ったとするならば、事件後も岩出山に居続けて手紙の交換などやっていたことになり、理解に苦しむ。なお、この出奔は、京屋敷の維持、朝鮮出兵などによる伊達家の財政困窮で、母義姫の局全体が生活に耐え切れなくなったのが契機と推定されている。治家記録は伊達家の正史としての作為(対、豊臣関白)があったと思われる。

④東京都あきる野市の大悲願寺という寺の過去帳を調べると、かつてのこの寺の住職を務めた僧侶に秀雄なる人物が存在しその人物が伊達政宗の弟であった記録がされていること。

・秀雄が没した寛永 19 年 7 月 26 日の条に、「法印秀雄 俗生ハ伊達大膳大夫輝宗乃二男、陸奥守政宗ノ舎弟也」とある。

・伊達政宗が没した寛永 13 年 5 月 24 日の条に、「奥州住 伊達陸奥守権中納言従三位藤原政宗 左京大夫輝宗之嫡子 沙門秀雄(之)兄 寛永十三丙子五月廿四日薨(身罷ること、死去) 七十歳也」とある。

⑤元和8年(1622)、当時的大悲願寺十三代住職海誉上人に宛てた政宗の手紙が『伊達政宗白萩文書』と呼ばれ、今も大悲願寺に保存されている。内容は、寺を訪れた政宗が庭に咲いていた白萩の美しさに惹かれ、江戸に戻り使者を立て株分けを所望したもの。なお、海誉上人は徳川将軍に重用された天海や崇伝と並ぶ人物と云われ、政宗は既に家康との信頼関係を築いていたので、海誉上人の耳にも政宗のことは入っていたと推定される。

⑥大悲願寺の現住職加藤章雄氏によると、前住職である父章一氏は、寺に伝わる話として次のように話していたという。「鶴若(秀雄)は頭がよく、政治にも口を出す弟だった。政宗の政治への口出しを心配した母義姫の計らいで、政宗は徳川家康へ鶴若を託す。家康と親しい増上寺の観智国師は甥で大悲願寺の住職であった海誉上人に鶴若を託したのだ。たった一人の弟を殺すことは伊達家の血統を絶やしかねない。そんなことをする訳がない」と。

この話の注目すべき点は、弟小次郎の処分は政宗と母の共謀だったという点である。

筆者(正喜)もこの説を支持したい。「この事件は伊達家にとってはお家存続の一大事であつ

た小田原参陣の直前に起こった。秀吉からの参陣命令をここまで拒んできた家督である政宗の首が危ぶまれるこんな重大なとき、藩主政宗が彼の唯一の弟であった小次郎を斬ったりするだろうか？

へたをすると伊達家が滅ぶリスクを抱えている。これは留守中の藩論の二分を恐れ、家督は政宗一人のみとする狙いで政宗と母が共謀して組んだ家臣団への偽装ではなかったのか。大悲願寺の過去帳の信憑性は極めて高いと考える。」

最後に山形に帰り、長年別居していた母が再び仙台に戻り政宗と再会するときに詠んだ二人の歌を紹介する。母の返しの歌が極めて親愛に満ちている。息子政宗の作った仙台が千代まで続くようにと願いを込めているのだろう。この歌を見る限り政宗と母の間には確執どころか、再開を喜ぶ親子の親愛の情があふれており、筆者も改めてこの説を強く支持したいと思った。

☆政宗と母義姫の贈答歌 『仙台市史 仙台藩の文学芸能』収載

○年月久しうへだたりける母にあいて
あいあいて心のほどやたらちねの
ゆくすえひさし千歳ふるとも
○母の返し
双葉より植えし小松のこだかくも
枝をかさねていく千代のやど

○関白秀次事件に連座し切腹命令の噂、配流処分を回避（冤罪事件）……『貞山公治家記録』

文禄4年(政宗29才)の4月、太閤秀吉より暇を賜わって仙台に帰国したが、帰国のとき関白秀次に暇乞いをし、鞍10口、帷子^{かたびら}20を餞別に賜った。これは秀次家臣栗野木工助秀用を通して贈られたが、後の秀次切腹事件のとき、秀吉から疑われる一因となった。

昨年秀頼が誕生して以来、甥の秀次に関白を譲ったことを後悔していた秀吉に、「秀次謀反の疑いあり」と石田三成が讒言したこともあり、京から出奔した秀次は遂に7月高野山で切腹自害した。この事件を岩出山で聞いた政宗は、秀次与党は連座し切腹という噂が流れていたもので、事の真相を探り対応させる為に白石宗実を先発させて施薬院全宗に相談させ、政宗は直接京には行かず大坂の全宗宅に入るようになった。

政宗が秀次与党との説が発生した理由は秀次家臣栗野木工助秀用が絡んでいた。栗野秀用は、もと伊達氏の家臣で、政宗弟小次郎に近侍していたが、小次郎事件があったとき逐電して越後に逃亡したのち秀次に仕え木工助と改めていた。木工助は秀次の執り成しにより政宗に許され、孤立傾向にあった秀次の与党大名の獲得のために政宗に積極的に接触したことが、図らずも秀吉の疑惑を生んだのだ。

秀吉の意を受けて尋問した使者・全宗らの執り成し、家臣中島宗求と湯田景康の路次での秀吉直訴が功を奏し、最終的には「兵五郎(秀宗)を家督に立て政宗を配流に処すること云々」の沙汰により、伊達家廃絶の危機は免れた。結局、政宗の配流罰はなかったが政宗にとってはきわどい冤罪であった。

『貞山公治家記録』には経緯が詳しく記述されている。奉行はじめ伊達家歴々の重臣19名が連判で、今回の厚恩を忘れず、公儀に対して政宗末代までの忠誠奉公を誓う誓詞を提出した書

状が残っている。

○正室、側室

伊達政宗には正室の愛姫の他に新造の方(猫御前)、飯坂局(松森御前)、阿山方、柴田殿、勝女姫、村上正重娘、お種の方(香の前)などの名前が伝わっている。子をなした女性のみ名前が残っているが、このうち寵愛著しいと言われたのが正室愛、猫御前、香の前です。愛姫は嫡子忠宗、猫御前は庶子にして宇和島分家の秀宗を産んでいる。この秀宗への処遇は正室腹と側室腹の別から本家を継がせなかったとされているが、自らの天下取りの布石として親藩形成を図ったとも、猫御前への寵愛の故にとも言われている。香の前は朝鮮出兵時に豊臣秀吉から茂庭綱元が秀吉の寵姫を貰い受け後に政宗に引き合わせたもので、原田宗資の室(津多)、亙理宗根が政宗落胤とされ綱元が系譜上の父として養育した。

なお、筆者の郷里、栗原市の岩ヶ崎城(鶴丸城)初代城主・伊達宗綱は正室愛姫の子、2代・宗信は側室柴田殿の子で、同じ年に生まれている。

また側室とは違うが、衆道関係においては小姓の只野作十郎へ宛てたラブレターが残されていたり、片倉景綱の息子重綱に対して大坂の陣出陣の前夜に先陣を願った重綱に、「そのほうに御先鋒仰せ付けられず候て、誰に仰せ付けられるべきや」と言って重綱の頬に接吻し、婦女子が大喜びしたとの記述が『片倉代々記』に残されている。片倉重綱は相当な美男子だった。

●伊達は伊達なり……『伊達家の秘話』伊達泰宗・白石宗靖著より

○政宗公と將軍

- ①政宗公が仙台から江戸へ入られる時、初代將軍家康と二代秀忠は、わざわざ奥州街道の入り口である千住大橋までお出迎えするのが習わしであった。しかし、三代家光は「予は生まれながらの將軍である」との自負心から、出迎えを嫌がったという。この千住大橋は文禄3年(1594)に、隅田川に最初の橋として架けられたもので、橋材は政宗公が寄進し、特に腐りにくい榎を選んだとのこと。
- ②全国で盛んに大名家の取り潰しが行われている時代、將軍家のご機嫌を損ねることは命取りとなっていた。將軍饗応は外様の大藩として警戒されていた伊達家における將軍家との友好を保つ一つの手段であった。家康、秀忠、家光と三代にわたり江戸桜田上屋敷(現・日比谷公園内)に招き饗応を行った。その回数は、家康1回、秀忠7回、家光3回に及んだ。

○美食家政宗公

政宗の趣味、料理は玄人はだしであり、元々は兵糧開発が主眼であり、岩出山名物の凍り豆腐と納豆(ずんだ)は政宗の開発したものとされる。政宗公の言動を書き記した『政宗公御名語集』によれば、“少しも又、料理心のなきは、拙き心なり”というほどに「食」に対するこだわりには強いものがあつた。皿数の多いのは無用で、名物や珍味よりも、たとえ一品でも自ら料理して盛るならば、それが最大の料理であるといっている。

○伊達者の心得

お洒落に気を使う人のことを「伊達者」とも呼ぶ。流行となっている当時の風俗を「当世とて、老若ともに、髪ふたふたと伊達に結い、帯を引き下げて、身にもあわぬ袴^{ゆき}を長く、袴をはねさせ、直刀差し、滑り道をも反りて歩く。これ一つとして羨む所なし」とあり、苦々しく思っていた。小姓たちには常々、侍の本分に忠実であるように戒めていた。

●政宗の手紙を見る……『伊達政宗の手紙』 佐藤憲一著より

佐藤憲一氏の著作から代表的な手紙を紹介する。

○片倉小十郎景綱への手紙……「誕生間近の子供を誕生させよ！殺すな！」

【現代語訳】

そなたは誕生間近の我が子を殺すと言っておるようだが、どうか私に免じて助けてやってくれまいか。将来のこともおぼつかないのに、そなたのことをとやかく言うのもおかしいが、ただただ私に任せて欲しい。もし子供を殺すようなことがあれば、そなたを恨みに思うぞ。どうか助けてやってくれ。

【解説】日付はないが、内容から天正12年(1584)末と考えられる。此の年10月、政宗は父輝宗から家督を譲られ、伊達家17代を継いだ18才の時である。一方、小十郎は28才、『片倉代々記』によれば、この時命拾いした子供は、小十郎の長男重綱であった。なぜ小十郎は生まれ出る我が子、しかも初めての子を殺そうとしたのか。政宗にはまだ子がなく、夫人愛姫との不仲説もささやかれていた。主君を差し置いて子宝に恵まれたことへのこだわり、後ろめたさが小十郎にはあったのだろうか。

○趣味を通じた付き合いと幕府・諸大名・公家との良好な関係維持

政宗は武将であり政治家であると同時に、豊かな趣味と教養を兼ね備えた文化人でもあったのだ。

当時流行した茶道をはじめ、香道、能、謡など、芸道は多岐にわたる。漢詩、和歌、連歌、狂歌など文芸も愛し自作の詩歌も多い。更には書に秀で、その見事な筆跡は生前から他家で掛物にされたと伝えられる。彼の趣味と教養は、幕府要人や諸大名・公家との付き合いで重要な役割を果たした。

寛永10年(1633)、狂歌を添えた柳生但馬守宗矩宛ての自筆の手紙を紹介する。

【現代語訳】「今日はこちらに何時にお出でになりますか。明日は未明に(江戸を発って)仙台へ下りますので、何かと取り紛れています。お察しください。外記様とご相談なさって、少しでも早くお出でいただければ幸いです。“かりがね(雁がね)と同じ心のわが身かな 別れの袖はなく(泣く)ばかりなり” 一笑 一笑、かしく。3月13日 政宗(花押)」

【解説】柳生但馬守宗矩は新陰流創始者柳生宗厳の子、のちの大和柳生藩主で、当時、将軍家光の兵法師範。外記こと内藤外記正重は5千石の幕臣。ともに政宗が生涯親しい付き合いをした人で、長年将軍に近侍した吏僚である。二人の地位を重視し、政宗は日頃から進物を贈ってよしみを通じるとともに将軍、幕府に関する重要な情報を入手した。キリシタン禁令が起草された翌日には政宗の許に知らせたのが柳生宗矩である。慶長遣欧使節を派遣した直後の禁止令であり、キリシタン信者も多かったので、「領内での取締りに油断なきよう役人に厳重に申し付けた」との政宗書状が残っている。

○衆道(若衆道、男色)の相手へ……秘められた愛

【現代語訳】

思いもよらぬご丁重なお手紙、また起請文まで頂戴し、誠にかたじけなく存じます。さて、先夜は酒の席で私が何と申しましたか。酒を飲んだ勢いで、随分失礼なことを申ししてしまったのではないかと思います。私が心の底から貴方を疑っているのであれば、手紙かあるいは伝蔵や横

目(目付け)の者どもを使いとして私の気持ちを伝え、それで諦めもするところですが、貴方を疑う気持ちは私にはありませんでしたので、何もませんでした。しかし、酒のうえとはいいながら何と申し上げましたか、随分ひどく貴方を非難したようですが酔っていたため、まったく覚えていません。…以下、略。(この3倍の長文が続く)

【解説】男色というとアブノーマルな愛と考えてしまいがちであるが、この当時は決して特殊なことではなかった。社会的に非難されたり特別な目で見られるといったことも希薄であった。政宗、51,2才頃、かねて衆道の契りを交わした仲の只野作十郎なる小姓に宛てたもの。作十郎に横恋慕する男がいると政宗に密告する者が現れた。これに怒った政宗が酒席で作十郎を非難したため、作十郎は身の潔白と政宗への愛の誠実を証明するため、血判起請文を認めて政宗の許に送った。それに対する政宗の苦しい弁解の手紙である。元和3,4年の政宗51.52才頃の手紙。

○医道……日々の健康管理

医学への造詣も深く、日頃から自分と家族、更には近侍するお付きの者の健康管理に気を配っていた。毎日複数の侍医に脈をとらせ、自らも脈をとって健康には人一倍気を使っていたようだ。侍医のひとりである高屋松庵に宛てた手紙は、数日前から病臥している侍女の薬を届けるよう指示しているもので、症状を細かに知らせている。

「……昨夜もだいぶ熱が高かったらしい。今日は粥を少し食べたようだ。便通は大便が今月18日少しあっただけで、今日まで全然ないらしい。小便の方は問題ない。こんな症状だから加減して薬を届けてほしい」という内容で、殿様が侍女の枕元で問診している様子が目に見えるようであり、侍女が恐れ多く恥ずかしげにうつむいている様子が浮かんでくる。

●政宗の死に臨む姿……『木村宇右衛門覚書』 小林千草著『伊達政宗、最後の日々』から

政宗に近侍した小姓・木村宇右衛門が政宗の現行を記録した覚書は、政宗の17回忌が執り行われた慶安5年(1652)頃に成立したと推定されている。後段は政宗の死を看取る形でその身近近く常住したことを裏付ける“自分”を示す「それがし」という語から、覚書の信憑性を高めていると評価されている。

○将軍家光へのいとま乞いの江戸行き

寛永13年(1636)5月24日未明に江戸屋敷の病床で死去したのであるが、将軍家と伊達家との末永い交誼を願い、律儀にも定例の上府を前にした4月20日、病身をおして仙台を出発した。途中、白石城に立ち寄り城主片倉小十郎重長との「もはや生きて会えないかもしれない」と呟き涙した別れ、日光社参で奥の院にあと一步石段を登ればいいという所で転んでしまい、幸い顔にけがはなかったものの、左手親指の節を石に擦らせて出血したこと、等々が政宗の発した言葉とともに記録されている。

○将軍との対面

28日に江戸に着くと早速、老中・土井大炊頭利勝へ、「只今参勤上京したことを、ついでの折に家光公にご披露して頂くよう」家光公に登城の許しを願い、翌29日には同じく老中・松平伊豆守信綱を上使として将軍より「病氣をおして道中つつがなく参着したのを喜び、ゆっくり休養してから改めて対面し、積もる話をしましょう」とのお言葉がもたらされた。政宗は、「早速の上使あり

がたき仕合せに存じます。一年あまりご尊顔を拝見できず、明日朔日(1日)を逃したらもはや江戸城登城も出来なくなる、病気が日を追って悪化している、ぜひ明日登城のお許しを」と松平伊豆守に訴え、その声が届き5月1日に登城した。

家光は「つねより御そば近くへ」といざない、いろいろ積もる話をして昼時に、政宗は帰邸した。すると間もなく阿部豊後守を上使として、「それほどの病気をして参勤してくれたことを率直に喜び、私の主治医を遣わすので治療に専念するように」との家光の上意をうけたまわって、政宗は「御感涙をながし給う」と記録されている。なお、上使に直面するときはどんなに体調が悪くとも、裱姿になったといい、それを聞いた家光は「病氣中なればそれほどせぬともよい」と諭したという。政宗は「身分みやうがのため也。見苦しい恰好では將軍家をないがしろにし、御名をも汚し申し上げることになる」として、変えなかったという。

* “身分みやうが”という言葉は、学者によれば政宗が初めて使用したとされる。家光との対面は、政宗個人の“人”としての最後のつとめであるとともに、自分の死後も將軍家に仙台藩が恩顧を受けられるように確約を取り付けるという“公”としての責務でもあったと思われる。その意味するところは、“仙台藩主の身分が孫子^{まご}の代まで末永く続くことを願う”ことであろうと著者の小林氏は解説している。

○死を前にした頃……ユーモア、正室愛姫との交流

5月22日午後8時頃、失神したが直ぐに意識を取り戻すや、「人は強きようにて弱きものなり。……」と。

“死にかけた”ことを表現して言ったという。その日の宵から深夜、夜が明けるまで、政宗住居の寝間のあたりの屋根に、鳥が数多く集まり、ぱっと飛び立っては空中で組み合い、屋根に落ちかかっては鳴き騒いでいた。政宗はこれを耳に留めて、「鳥は靈驗ある鳥なり。さりながら今宵は誘っても(黄泉の国には)行かぬぞよ」と言い、笑ったという。翌23日の朝から政宗は、一段とご機嫌よく見えたという。折りしも同じ屋敷内の別棟に住む夫人の愛姫から使いがあり、“お病氣見舞いに来たいと度々言っているのに、「全快したら」とおっしゃて全然対面して下さらないのでとても不安で、やっぱり見舞いに行きたい”と言ってきた。それに対して政宗は、“もったもなことです、病気でやつれた見苦しい様子でお目にかかるのはどうかと思うので、よくなったら、あらためてこちらから連絡します”と返事している。重ねての愛姫からの哀願に対して政宗は、「……武士というものは妻や子供を死の床に集めて死ぬのは本分ではない。……」と、武士の心情を吐露している。

○最期の夜、あつけない死

23日の夜になって、政宗はいつもより時間をかけて行水をし髪まで洗わせ、湯殿より浴衣を着て御座の間へお入りになるとき、床に立ててあった“志津のなぎなた”を手にとり、鞘を外してからりと投げ捨て、二つ三つ振り回して「このような瘦身であっても、この長刀さえあれば、やみやみとやられはしない。ああ、名残惜しい日頃慣れ親しんだ志津の長刀よ……」と言って、長刀にもたれかかったという。その後、髪を結わせ、衣装を身に着けるのに、自ら“常には越中褌をつけているのだが、真紅の絹の二重に巻ける「まわし」をしっかりと身に回し、衣装も着くずれないように”着させたという。これはすべて最期の時の用意、即ち、死に装束であったのである。

寝間の床に入るときは、年配の侍女だけに看護を許し、時々目を覚まし「夜は何時ぞ」と尋ねられ、「百夜を明かすよりも今宵は長し…」と言ひ、また、ふと目覚めては「何時^{なんどき}」と小姓に尋ね、「はや明け方近く」と申し上げると、「死に際の時がきた。さらば起こしなさい。乱れた髪など身なりを整え、床の周りに散らかっているものを片付けよ」と、いかにも機嫌がいいように言い、小姓に両脇をゆだねて小用に立ったという。意識は覚醒していたものと思われる。小用を済ませて帰る段になり、「このところご苦労だったね。ずっと寝ずに詰めていて、さぞ眠いだろう。」とねぎらいの言葉をかけている。歩きだすと膝がガクツとして歩けなくなり、やっとのことで寝床のきわまでお連れすると、寝床の上に膝をつき、愛刀に今生の別れを述べ、床の間に安置しなおした。両手を合掌して喉の下にしっかりおさめて、しばらく祈っておられる風であったが、とろとろと眠られるように気を失われていく…、主治医の快庵法橋が走り寄り抱き起こして耳に口をあてて言葉をかけた。政宗は目をぱつちりと開けて、何か一言おっしゃったようで、そのまま消えるようにすうっと息が絶えてしまった、と記録されている。

○将軍家光公の上使

将軍家より上使として酒井讃岐守(忠勝)が遣わされ、「只今、政宗死去の報に接し、とても心を痛めています。先日お見舞いしたとき、こっそりと 24 日あたりが山場だと言いましたが当たっていましたね。忠宗の心中や家来の方々の心中も察しています」との上意が伝えられた。

○遺骸は仙台へ

佐々若狭守(小姓頭)が前もって用意していた朱(今でいう硫化水銀)と水銀と石灰、塩で詰め固め、束帯の装束で駕籠にお乗せし、全員髪を剃った出家姿の御供をつけ、日暮れから江戸屋敷を出発し仙台に向かった。長町の大橋を渡って、若林城を視野にのみおさめて、北山にある覚範寺に乗り物を入れた(道中 9 日、6 月 3 日着)。そこには清岳和尚が出迎えに立っていた。2夜3日覚範寺にて御法事後、経ヶ峯に御霊屋をつくり、その石室に納められた。法名は瑞巖寺殿貞山禅利大居士。享年70才。石田将監ら15名の家臣と5名の陪臣が殉死した。

●宇和島藩 立藩の長男秀宗への想い……「貞山公御教諭」

宇和島伊達家は、伊達秀宗【天正 19 年(1591)～明暦4年(1658)】を藩祖とする大名家。秀宗は伊達政宗と側室・新造の方との間に長男として誕生(幼名:兵五郎)、岩出山(現・大崎市)で家督後継者として育てられたが、わずか 4 歳で天下人・豊臣秀吉へ人質として差し出された。しかし、兵五郎は秀頼(幼名:拾丸)の遊び相手として大切に育てられ、6歳元服の折には、秀吉の一字を拝領し、『秀宗』と名乗ることとなった。

秀吉没後、政宗は徳川に組したため、秀宗は関ヶ原合戦直前に監禁されたが、徳川方の勝利で秀宗は危うく難を逃れたのだ。その後の慶長7年(1602)9月、政宗は 12 歳の秀宗を家康に拝謁させ、今度は徳川家の人質となった。慶長 15 年(1610)、政宗・正室愛姫の子、虎菊丸が徳川秀忠の一字を拝領し忠宗と名乗り、仙台伊達家の後継者となることが決まったのである。

慶長 19 年(1614)11 月、家康が豊臣家を滅ぼすために大坂冬の陣を起こすと、政宗・秀宗父子は、1万人の兵を率いて徳川方に参戦。政宗の幕閣へ働きかけもあり、冬の陣の功績として、当時幕府直轄だった宇和郡 10 万石が秀宗に与えられた。

秀忠は伊達秀宗を国持大名格とし、慶長 20 年(1615)3月 18 日、秀宗 25 歳のとき、「五十七騎」とともに板島丸串城(現・宇和島城)に入城、これをもって宇和島伊達家が誕生した。

將軍家から 10 万石を与えられたため、宇和島伊達家は仙台伊達家の分家ではなく、総家と支家という血縁のみのつながりで、明治を迎えるまで9代に渡って宇和島を治めた。

●貞山公御教諭……秀宗への遺言

【翻 刻】

覚

- 一 両御所様之御節目、乍勿論、時々刻々不可存忘事
- 一 召使之者共に、常々加不便可召使候、乍去、咎者免□□(許有力)敷事
- 一 不断弓矢之心懸、無申迄事
- 一 学文之事、口上、付碁将碁(碁)などの事
- 一 家中之者共、人ヲ与表裏等之義、能可聞分事

以上

右五ヶ条之外、申度置義候得共、此外者、手前分別次第尤二候、猶兩人口上二申付候也恐々謹言

二月廿七日 政宗(花押)

伊達侍従(秀宗) 殿

【解釈】

- 一、藩主として取り立ててくれた將軍家(家康・秀忠)への御恩を忘れず、お仕えすること
- 一、仕えてくれるものを大事にしない 但し、罪を犯したものは許してはならない
- 一、常に武芸に励みなさい
- 一、学問に励み、囲碁将棋などもたしなみなさい
- 一、家臣の気持ちをくみとり、その考えを理解しなさい

右の五ヶ条のほかにも言っておきたいことがあるが、あなたは分別のある人だから、詳しいことは兩人(志賀右衛門・山家清兵衛)に伝えておく

二月二七日 政宗

秀宗 殿

●政宗についてのその他の逸話

- ・『政宗公御名語集』には「馳走とは旬の品をさり気なく出し、主人自ら調理して、もてなすことである」という**政宗の料理観**が残されている。
- ・伊達邦宗(政宗直系 15 代当主)が著した『伊達家史叢談』に、**明治天皇**が政宗を「武将の道を修め、学問にも通じ、外国の事情にも思いを馳せて交渉を命じた。**文武に秀でた武将とは、実に政宗の事である**」と評した、と記されている。
- ・経ヶ峰歴史公園の「**臥龍梅**」は、昭和 54 年(1979)の瑞鳳殿再建に際して若林城跡から移植したものである。政宗が大悲願寺 13 世海誉の弟子として在山していた弟・秀雄の元を訪れた時に、庭にあった白萩を気に入って所望し、かわりに臥龍梅を大悲願寺に贈っている(「追って曾掛に候へ共、折節に任せ、小袖壺重ね進め候。以上。態^{わざわざ}飛脚を以って申し入れ候。先度は参り、会面を遂げ本望に候。仍無心の申す事候へども、御庭の白萩一段見事に候き、

所望致し候。先日は申し兼ね候て罷り過ぎ候。預候はば恭かるべく候。猶後音を期し候。恐惶謹言 松平陸奥守 八月廿一日 花押 彼岸寺御同宿中」。

・明和7年(1770)に仙台藩士・飯田道時が著した軍記物『伊達秘鑑』には、政宗の下には離間・扇動工作に従事した**黒脛巾組**という忍者集団がいたとしている。黒脛巾組関連の人物名には実在の伊達家臣の名が借用されているが、一級史料には黒脛巾組という名称や類似の集団の記述は見当たらない。

・政宗の幼名にちなんだ**梵天丸茄子**という茄子がある。米沢市農協が中心となって窪田茄子と仙台長茄子を交配させて開発した品種で「病気に強く品質が良い」と言われており、漬けると色鮮やかな青になる。米沢では夏の風物詩としてよく家庭などで作られる。

・伊達政宗が描いたとみられる絵が宮城県塩釜市の旧家に保存されている。

「梅小口図(部分)伊達政宗筆」⇒



梅小口図(部分) 伊達政宗筆
江戸時代 個人蔵(新発見)

●「伊達ぶり」と「伊達もの」

善田紫紺著『子孫が語る歴史を動かした偉人たち』の中で、18代当主伊達泰宗氏が語っている話である。伊達の薄着や伊達メガネのような外見を飾るという意味で「**伊達ぶり**」が語られることが多いが、「見えぬところにこそ本当の価値がある“**伊達もの**”の美学」こそが、政宗の生き方を象徴しているという。

「政宗公の御霊屋である瑞鳳殿の中にその場所があるという」。瑞鳳殿は藩主を継いだ忠宗公が、政宗公の遺命を受けて30万両をかけて1637年に造営したが、戦災で焼失し、昭和45年に復元された。何度か見学したことがあるが気が付かなかったし、初めて聞く話である。それは、「**極彩色で彩られた涅槃門には、唯一、彩色されていない部分がある**」というのである。「実は、**香木**で作られた部位がそれです」。

香木は輸入品で同量の金にも相当する貴重なもので、一番目立つところに一番価値のあるものを使っているのです。

しかも、香木の部位は**透かし彫り**で作られ、その奥には**金箔**が貼られ、日が当たると金箔が反射し、透かし彫りは**シルエット**となり、伊達なる光を発するのです」。

ガイドブックには載っていないという。写真を見るだけではその部位は特定できないが、皆さん分かりますか？



●黒脛巾組は存在したのか？

伊達政宗が創設したと言われる忍者集団で黒革製の脛巾^{はばき}を標章にしていた。

創設について明和7年(1770)半田道時が記した『伊達秘鑑』によれば、「政宗は信夫郡鳥谷野城主安部対馬守安定に命じて50名の忍者を選抜し黒脛巾組と名づけた。

柳原戸兵衛・世瀬蔵人を組頭とし、その奉行として安部に彼らを預けた」とある。

任務は、諜報活動、流言飛語などで、武力行為ではなかった。人取橋の戦いで惨敗の危機に当たり、太宰金七らの流言飛語の間に退却できたことに触れている。

また、新井白石の『藩翰譜』でも、天正 18 年(1590)の小田原征伐で、政宗が豊臣秀吉の動向を探索するために太宰金七らを小田原に潜入させていたという記述がある。



後世、その存在について、戦国時代や江戸初期の同時代史料では確認できない呼称であり、江戸中期以降の伊達家関係資料に突如登場することから、後世の架空の可能性があるという異説がある一方、仙台市太白区西多賀には、子孫である大正期の仙台市長・鹿又武三郎氏が、忠宗公に仕えた「黒脛巾組」の鹿又戸兵衛(鹿股戸兵衛)を祀る東原神社を昭和 37 年に建立された。2017 年には理由不詳だが取り壊されて更地にされている。

* 西多賀歴史探訪会編「西多賀探訪記第4号」によれば、西多賀四丁目の高台にある小さな神社で、鹿股戸兵衛を祀る。正面には、「押廟両社大明、鹿股戸兵衛大明神」の額が掲げられている」と書かれています。「神社の西約 100m の所に鹿股戸兵衛の墓碑が建っている。表面には「播磨十六代之孫 鹿股戸兵衛の墓」と記されている。



完